

随想

時代物小説家は凄い

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

新型コロナウイルス感染症に振り回される社会に拘泥されながら、インターネットや書物に接していると、つい深刻な問題ばかりが目についてしまう。振り返ってみるとこしばらくは、経済動向や貧困問題、日本の国際世界における地盤沈下等、鬱となりかねないような話題を取り上げていた。

今、久しぶりでリラックスできる小説を読んでみる。垣根涼介氏(注1)による『涅槃』(上・下)がそれである。没落した宇喜多家を再興した宇喜多直家を主人公とした小説で、時代背景や人物描写、登場人物の感情表現等に改めて「歴史小説家は凄い」と実感させられている。

二〜三週間前にネットで調べ物をしていた時、映画・座

頭市で名を馳せた《勝新太郎》の逸話が目についた。興味を持たれる向きは、ゲーグル等で《勝新太郎》を調べると《SnATION》で秘められた伝説シリーズ《勝新太郎、豪快破天荒伝説》として読める。まさに破天荒なキャラクターと人生路が面白く追える。

著者の目を引いたのは《座頭市の由来》である。その由来は以下のように紹介されている。

座頭市は作家・子母澤寛(注2)の雑誌《ふところ手帳》にある。子母澤寛は房総地域の侠客、飯岡助五郎の取材に際して、盲目の侠客・座頭(注3)の市の話の聞き『座頭市物語』として、記述した。

そこで、《ふところ手帳》を古本で探したところ、運よくアマ

ゾンの中古本で入手できた。この随筆(随筆もあるが、短編小説が多い)には二六編の小品がまとめられている。それぞれに登場するのは勝海舟の父親である勝小吉、榎本武揚、徳川家康等々がある。われわれが知る徳川家康等は戦略家として天下を取るための策謀を凝らした《タヌキおやし》のイメージが勝つが、この小品集にある徳川家康については、有馬大膳より有馬流兵法を学びまた新当流の教えを受けて興義皆伝を受けていること(つれづれ日記)や、ト伝流を正統松岡兵庫助から学び《二の太刀》の極意を得ている上、新陰流の皆伝、弓は竹林流の免許、鉄砲も当時の名手稲富外記について皆伝であった、というような逸話が数多く語られている。

目当ての座頭の市は《座頭市物語》として納められ九ページの小編にまとめられている。一部を引用してみよう。

天保の頃、下総飯岡の石渡助五郎のところに座頭市という盲目(めくら)の子分がいた。何処からか流れ込んできて盃をもらった男だが、もういい年配で、でっぷりとした大きな男、それが頭をそって、柄の長い長脇差を差して歩いているところは、どう見ても盲目とは思えなかった。

——中略——大酒をするが、かつて一度も乱れない。——中略——奴目あきよりも余つぽどからしが効いて怖い。助五郎身内七〇幾人——中略——帯を預かっている成田の甚蔵のような奴も子の座頭市には一目も二目もおいてい。何故かという、市は盲目

でありながら、刀の柄へ手をかけるだけで、対手がすくんでしまふというくらいに抜刀術居合がうまい。いやうまいなんぞと一口で片付けられない大した腕で、その気合に入ると知らず知らず四辺のものがしんとするようにな不気味な危機が迫ったものだという。

この後もこうした語り口で物語が続くが、すべて引用しては紙幅が足りないし、著者の語るところがなくなる。助五郎は岡っ引きを許され(八州取締り出役手先頭)、七〇名の子分とライバルの笹川の岩瀬繁蔵を襲うが、総勢二九名の繁蔵に返り討ちに合う。これを恨みに思い、手の込んだ悪手で三年後に繁蔵を暗殺してしまった。これは汚職小役人と結託した助五郎の世渡りの術として悪評が高い。暗殺の卑怯さに加え繁蔵の死体をながししろにした上で、亡き繁蔵を笑いものにする助五郎を不快に思った市は、居合で助五郎の前にある徳利を切つて替したうえで、盃を叩き返して一家を出る。市が助五郎の限界を知り妻に語

るのが、『やくざあな、御法度の裏街道を行く渡世だ、言わば天下の悪党だ。こ奴がお役人と結託するようになっては、もう渡世人の筋目は通らねえものだ。——後略——』というセリフ。勝新太郎の歌う演歌《座頭市》にあるセリフによく似ている。

勝新太郎の情報によれば、彼の代表作である《座頭市シリーズ》で最初の座頭市物語のみが子母澤寛による《ふところ手帳》を原作とし、短編に相当の物語を加え、アレンジしている。原作のあるのは最初の一作のみで、その他のシリーズは勝新太郎自身が発案したストーリーで、いわば《天才的な場当たり方式で作成されていた》というが、それは別件。

著者がいたく感じたのは、子母澤寛や司馬遼太郎等の歴史・時代小説を紡ぐ小説家が、ストーリーを編み出す前に行う歴史情報の調査がいかに詳細であり、歴史的事実を骨組みにして、主人公をはじめとする登場人物の個性を設定して、歴史となる事実の枠組みに割り込ませ

てゆくその創造性と、登場人物それぞれの個性の(作者の設定によるものであるはず)絡み合いを含めた感情の動きや相対しての会話(ときには独り言)を語らせる術の妙は、いかにも天才的といつて良い。

冒頭に挙げた垣根涼介氏の作品には(注1)に挙げた色んなジャンルの小説があるが、著者にとつては彼の歴史小説が秀逸である。これまでに、『涅槃』(上・下)の他に『室町無頼』を読んだが、彼のケースでも子母澤寛・司馬遼太郎等々と同じように、時代背景の時代考証が細やかであり、また登場人物の心理描写も巧みで、つい物語に引き込まれてしまう。

サイエンスを追いかける世界で、事実と向かい合う毎日を習慣としていけると、時間のペールに隠されている姿を掘り起こし、すでに冥府へ旅立った人々に命を吹き込み、それぞれの登場人物の思いや言葉、生きざままで読むものの心を動かす力に改めて《凄い》と感じてしまう。

注1…一九六六年四月二十七日生誕。筑波大学卒。リクルートから商社勤務。近畿ツーリストに七年勤務後小説家。ヒートアイルランドシリーズ。君たちに明日はないシリーズ。歴史小説には光秀の定理。室町無頼。信長の原理(上・下)。涅槃(上・下)がある。

注2…一八九二年二月一日、北海道厚田郡厚田村(現在石狩市)で生誕。一九六八年没(七十六才)。時代小説家。北海道から明治大学法学部卒。読売新聞社から東京日日新聞に勤務。記者の傍ら、新選組始末記、新選組遺聞、新選組物語(新選組三部作)を出す。これらは司馬遼太郎や池波正太郎等に引用される。代表作は新選組始末記、父子鷹、勝海舟、駿河遊俠伝等。随筆『ふところ手帳』に座頭市物語がある。

注3…当道座(琵琶法師の座として発足)の四つの盲官の一つ(検校、別当、勾当、ことう)う、座頭。盲官とは琵琶、管弦、按摩、鍼治療等を生業とした、盲人に与えられた官位。